樹木

石、刀掛石、蹲上石、水氣能拂べし、手水鉢の前右に水掛ぬ樣にすべし、始に水打時水氣あらば、能々水氣を拂てよし、總て水の打樣大凡に心得べし、茶の湯の肝要、唯此三炭三露にあり、大概にいはば、客露地入前に一度、中立前に一度、會濟て客立るゝ時分一度、都合三度也、朝晝夜三度の水、すべて意味深事と心得べし、後の水を立水といふ、宗及などは、立水心得がたし、何ぞや客をいねといふ樣にあしらう、是いかゞと被申候よし、休（千利休）の云、夫大に本意の違なり、總て侘の茶の湯、大體初終の仕舞二時に過べからず、二時を過れば、朝會は晝の刻にさわり、晝會は夜會にさわる、其上侘小座敷に、平振舞遊興のもてなしの樣に、便々と居候作法なし、わび亭主濃茶呑、薄茶まで仕廻、又何の事をか致すべき、客も長物語止て、被歸事尤也、其歸ル時分ゆへ、露地を改メ、疎略なき樣に手水鉢にも又水をたゝへ、草木にも水を打抔すべし、客も其程を考へて立也、亭主露地口迄相送り、暇乞申べきよしの給ふ也、

〔茶道織有傳下〕内外ともに路次にかわる事なし、冬は水うつべからず、さうじのみぬんを入べし、二月時分より十月あたりまでは、客前に一度、中だち前に中水一度、うす茶の時立水、以上三度うつべし、就中夏はおほくうつ也、時の温寒によるべし、

〔茶話指月集上〕古人は露地の水打かげんを吟味したり、譬ば口切の時分は、客の入りに、一つの飛石三分程晞あがりたるをよしとす、甚ダ寒する時は水打ずとも、夏は涼敷やうに打しめしたるよし、くゞり口の石一つは、ぬらさぬが故實にて有ル也、

附　客を見かけて、水おほく打はいとさはがしく、裳もぬれ、木などに打たるは、そのしたゝり衣におちて、いぶせくこそ侍れ、

〔南方録二〕露地之部　木之栽やう

市中の宅邊とても、深山幽谷をうつし來たる心也、木植樣等さま〴〵心配有べし、深山は松ある